

詩仙・酒仙の李白

文 道 平

〔Ⅰ〕 中国の詩人と酒

〔Ⅱ〕 詩仙・酒仙の李白

〔Ⅲ〕 李白と関わりの深い朝鮮の詩人達

〔Ⅰ〕 中国の詩人と酒

人間はいつから酒を飲むようになったかは定かではないが、人間の歴史とともに大変古いことは間違いないようである。中国の最古の王朝殷の時代を見ても、爵、角、罍、盃などのような酒器が発掘されており、日常の飲物として、特にその刺戟による気分転換や陶酔を誘うものとして、あるいは儀式、とくに宗教儀礼に不可欠の要素として重要な役割を果たしてきた史実からしてその歴史の古さを知ることができる。

中国では、少なくとも男の場合は酒を飲むのが当然であり、飲めないのは、なにか肉体的欠陥でもあるかのように見られるくらいである。特に詩人の場合、酒のすきな有名詩人が多く、酒を飲んで高揚した精神的状態で、即興的な詩を多く歌っており、「飲酒」という題の詩も結構多い。

帰去来の辞で有名な陶淵明という人はたいへん酒の好きな人であった。田園生活に帰った彼は、長い秋の夜に酒を飲まない晩とてなく、独り酒で酔いながら酔中になに何句も詩を作り、友人に書き写させては飲びに浸ったということである。つぎの飲酒の詩は、このことをよく表している。

余間居寡飲、兼比夜已長。

偶有名酒、無夕不飲。

顧影独尽、忽焉復醉。

既醉之後、輒題數句自娛。

紙墨遂多、辭無詮次。

聊命故人書之、以為歎笑爾。

飲酒 二十首 序

日本文字に多くの影響を及ぼしたといわれる有名な長恨歌、なかんずく源氏物語にかなり引用⁽¹⁾されている長恨歌の作者、白樂天の勸酒の詩を見よう。

友人に一盃二盃また三盃と勧めながら、心中に醒めた時よりも酔時がよく、官を辞して田園に帰った陶淵明の帰去来を想起しながら、酒を飲むために典錢する、との意味である。

勸君一盃君莫辭

勸君兩盃君莫疑

勸君三盃君始知

面上今日老昨日

心中醉時勝醒時

……

……

歸去來

頭已白

典錢將用買酒喫

晋の時代から歴史は降って唐時代に入ると、まるで夜空に明星が輝くように、数多くの詩人を輩出したばかりでなく、酒をこよなく愛した

詩人も多かった。

社会の矛盾を厳しく洞察した詩聖杜甫もやはり酒の好きな人であった。朝廷からもどつてくると、毎日のように、春衣を質に置いて、曲江のほとりに来ては酔いをつくして帰る。酒代の借りは珍しくもなく、到るところにあるが、どうせ昔から、人生は七十まで長生きするものは稀なのだ。私は春景色に伝言したい。わが身も春光も、もろともに流転してゆくから、暫し相賞して、お互いにそむかぬようにしようではないかと、つぎのように吟じている。

曲江（二）

朝回日日典春衣
 毎日江頭尽醉歸
 酒債尋常行処有
 人生七十古來稀
 ……
 伝言風光共流転
 暫時相賞莫相違

また杜甫の「飲中八仙歌」は、八仙の酔態を詠じた詩歌であるが、都長安における八人の酔態を客体化した型破りの詩として実に面白いばかりでなく、当時の八仙を概観しながら今日の酔客とを照合すればなるほどと肯定させる部分が多い。しかしながら何か超然としたところは時代的な相違を感じないでもない。これら八仙は杜甫とは関係の深い人たちであるが、詩はまず年長者からはじまり、賀知章は、井戸に落ちて水底に眠り、汝陽王は、麴車に涎を流す、左丞相の李適之は、長鯨が百川を吸うが如く、その飲みぶりがよく、作者の親友である崔宗之は、觴（さかづき）をもちあげて白い眼で青空を見わたすくせがある。文章力のある蘇晋は仏にこっているのに、酔っぱらうと刺繍した仏像の前で座禅をくみ、草書の名手である張旭は、酔うと頭を墨汁の中につっこみ、髪に墨を含ませて

雲烟の如く字を書く、弁舌家焦遂は、五斗の酒を飲むと声高な弁論で一座の人びとを圧してしまう。

以上のように、二句ないし三句を用いて、それぞれの酔態を滑稽に調刺しているが、詩仙の李白だけは、例外的に四句をさいて、つぎのように歌っている。（あまりにも有名な詩句である。）

李白一斗詩百篇
 長安市上酒家眠
 天子呼來不上船
 自称臣是酒中仙
 飲中八仙歌

杜甫

李白は、一斗の酒を飲むうちに百篇の詩をつくることのできる。いつも酔っぱらって、長安の市中に眠ってしまい、天子のお召しがあっても、酒中の仙人であるとうそぶきながら、船にのぼらない、という四句は、玄宗が蓮池で船あそびの折、詩を作るべくお召しを受けながら、時あたかも泥酔して船に上ることができず、宦官高力士の介ぞえによって始めて船に乗ったという李白の逸事を詠じたものようである。

杜甫の「飲中八仙歌」の如く、李白の酔態をよく表現しており、彷彿とするものがあるが、その飲みかたは、大へん快活であり、豪放である。しかし陶酔のなかにも高揚した理性的精神があり、感受性の繊細さを失ってないことは、つぎの「清平調詞」三首を一気に詠じあげたことから窺い知ることができる。

清平調詞（一）

雲想衣裳花想容
 春風拂檻露華濃
 若非群玉山頭見
 會向瑤台月下逢

清平調詞（二）

一枝濃艶露凝香
雲雨巫山枉斷腸
借問漢宮誰得似
可憐飛燕倚新粧

清平調詞（三）

名花傾國兩相歡
長得君王帶笑看
解釋春風無限恨
沈香亭北倚蘭干

この有名な清平調詞三首の中、その二首は妖妃の美をいやが上にもほめ賛えている名作である。一枝の紅艶な花が露にぬれて香を凝らしている、とその美貌を最高にきわ立たせるとともに、漢宮に誰が貴妃にまさるものがあるだろうか、と借問しながら、前漢末の皇后趙飛燕の化粧したての姿ぐらいであろう、と。

その三首は、名花たる牡丹、傾国の美女、あいともに歓楽のさなか。それを見まもる天子の笑み。春風がもたらす愁いに満ちた感傷も、おのずとほぐれ、美妃はいま沈香亭の蘭干にもたれている、と結んでいる。

杜甫の「飲中八仙歌」に歌われている如く、天子のお召しがあっても船あそびをお伴しないほど、酒中の仙人であると自負した李白であったれば、この詩をしたためる直前か⁽²⁾、あるいは他の賜宴の時であったかは定かでないが、翰林供奉として羽振りをきかせていた詩人李白が、酔中に宦官の高力士に靴をぬがせたという逸話は想像するに難くない。玄宗の前に召しだされた李白は、二日酔いがさめない中にも、差しだされた金花箋に、たちどころに詩をしたためたものだから、玄宗はこれより李白を眷顧すること諸学士とは特別に異なるようになったことはいうまでもない。長安における詩人として一躍有名になった李白にとってこの時期ほど円熟

し、最良の時はなかったであろう。

ところが急転直下その後がわるい。幼年期から宦官であり、すさまじい権力闘争の荒波を遊泳し、謀略を練るのにもたけた奸智な高力士に恨をかったことである。さきにも述べたように、李白が酔いだちまぎれにその靴をぬがせたことに侮辱を感じた高力士は、機会あらば李白を蹴落そうと虎視眈々とねらっておったのである。貴妃が「清平調詞」三首を楽しそうに吟じているのを見て、「飛燕のような賤しい女を貴妃さまに比べたのは、不敬と申すべきでしょう」と讒言した。これがいわゆる高力士讒訴事件である趙飛燕⁽³⁾は前漢末の成帝の寵愛を得た皇后であり、歌舞も巧みであり、その名の如く飛燕のように絶世の美人であったが、晩年は庶人に落とされ、悲劇的な末路を遂げた哀れな女性であった。このことに擬えて、宦官特有の素振りで殷勤に寄りそって讒言したものだから、貴妃はもっともなことと信じてしまったのである。杜甫も「江頭に哀しむ」詩で、貴妃を「昭陽殿裏第一人」といって、飛燕に比したのを見ても、当時は、一般に言われていたことで、李白も詩的レトリックとして用いたのみで、他意があったとは考えられない。

「開元の治」で政治的手腕を発揮しておった名君も、貴妃に惑溺した暗君に反転した玄宗は、貴妃の進言をまに受けて、李白を長安から追放してしまうのである。中国の歴史において、天子が宦官に牛耳られる典型的な一つの例証といえるであろう。

豪放らい落で自由奔放な李白には、所詮は俗物どもの巢窟である宮中での生活には、愛想が付き、足かけ三年の都ぐらしに見切りをつけて放浪生活に入るのである。

〔Ⅱ〕詩仙・酒仙の李白

「李白一年詩百篇」と歌われる如く、酒は李

白の詩情を横溢させる原動力であった。彼を天上の謫仙だとか、あるいは月と戯れようとして鯨に乗ったとか、といわれるのは、酒を愛好しながら酔郷を訪ねて天下を飄遊し、風月を友として詩を賦した、唐代のすぐれたロマン派の詩人であったことを物語っている。

李白はいかにも山水の中に身をゆだねた遊仙のように思われるが、その反面、彼は自己の夢想する理想が、現実と甚だ矛盾した当時の政治に悲憤慷慨した政治的叙情詩も非常に多い。李白は自分を大鵬に見立て、雄大な気概で、帝王の補弼となって国に貢献し⁽⁴⁾、民を塗炭の苦しみから救う抱負をもって奮闘するつもりだったが、暗黒の現実のために政治的役割を果たすことなく、失意の一生を送らなければならなかった。しかし、李白の国を思い、民を思う心によって、その浪漫主義にあふれた創作詩は不滅の光を放っている。

李白はまた放浪の中にも望郷の情が厚いばかりでなく、詩友との離別を惜しむ詩たとえば「黃鶴楼にて、孟浩然が広陵にゆくを送る」の中では、友をのせた舟の帆かけが次第に遠ざかり、碧空の中に吸い込まれるように消えうせ、あとはただ、長江の水が、遙かな空のはてに流れるばかり、と別後悵望の情をのべて結んだところは、限りなき離思と失望の情が、言外にあふれて、くめども尽きぬ友情の絶唱といえるであろう。

李白の詩は、男女の別離の情も細かによく描写している。

「子夜呉歌」は、長安を一面に照らす月の光、衣を擣つ砧の音、肌寒い秋風の吹き尽きぬ情景に心動かされて、西域の果ての玉関に駐屯する夫の心情に呼応する思いをこめて、帰還を待ちわびる哀調にみちた詩であり、「烏夜啼」は、たそがれ雲のかかる城壁のあたりに、ねぐらにつこうと飛び帰ってくる烏の啼き声に、機織る女性が梭を停めて、もの悲しげに遠く離れた愛人のことを思う、孤房の婦情を歌ったものである。

「子夜呉歌」や「烏夜啼」などは、夫に別れて暮らしている気の毒な女性の切ない気持ちをよく現している。

ここでは、李白が足かけ3年の長安出仕時代を境にして、その前後期の長い漫遊時代に酒徳を讚美し、酒興を叙述し、あるいは酔をかりて胸のうつ憤を晴す詩篇を考察することにする。

李白は、生来、性格的にも自然の風物が好きであったかも知れないが、多感な青年期を蜀の美しい自然の中に育った彼は、生涯を通じて自然の風物を愛し、自然の美しさとか、静けさ、神秘さを求めて、広い中国の大地を、西は峨眉山から東は天台山に、南は零陵から北は幽州にまで、放浪の人生を送りながら詩情を豊かにしたように思われる。

李白は、美しい自然に囲まれた、思い出多い蜀をあとにして、放浪の旅に踏みだす途中の詩で、彼の二十五歳のときの作と思われる「峨眉山月歌」は、あまりにも有名である。

峨眉山月半輪秋
影入平羌江水流
夜發清溪向三峽
思君不見下渝州

李白は秋の半輪の月夜、平羌江に月影の美しく映るのを眺めつつ、清溪に着いたが、その夜この清溪を発って三峽方面に向かって、旅に出ようとしている。君を思えど（ここでいう君はむろん月のことで）見えず渝州へと下っていく、というのである。

李白は安陸を中心に約十年間各地を放浪して歩く頃に、いろいろな人生経験をするとともに、詩風を熟成させたものといえよう。安陸より西二〇〇キロメートル程にある風光明媚で史蹟の多い襄陽を訪れたとき作った襄陽歌は、詩と酒を生涯の良き友とした李白の詩仙・酒仙としての人生観がよく現れている。

襄陽の歌

落日没せんと欲す岷山の西
接羅を倒著して花下に迷う
襄陽の小兒齊しく拍手し
街をさえぎって争うて唱う白銅鞮
傍人「借問す何事をか笑う」
「笑殺す山公酔うて泥に似たるを」

鸚鵡の杓

鸚鵡の杯
百年三萬六千日
一日須らく三百杯を傾くべし
遙かに看る漢水の鴨頭緑
恰かも似たり葡萄の初めて醗酵するに
此の江若し変じて春酒と作らば
墨麴便ち築かん糟邱台

……

……

清風朗月一錢の買うを用いず
玉山自ら倒る人の推すに非ず
舒州の杓
力士の鎗
李白爾と死生を同じくせん
襄王の雲雨今安にか在りや
江水東流して猿は夜声す

まっ赤な夕日が岷山の西にまさに沈もうとしている時に、白い帽子を倒に冠り花の下をさまよう人がいる。襄陽の子供たちが手拍子揃えて、街を遮りながら争うて「白銅鞮」という童謡をうたっている。通りかかった人が尋ねる。「何事でそんなに笑っているのか」と云えば、「あのおじさん（山公）がべろべろに酔っているのがおかしい」と子供は答えるにはじまって、中国で屈指の大河である漢水の川全体を緑酒にしたいという、酔眼に浮かぶ幻想の世界を特徴ある誇張でうたい上げている。

……

清風と朗月を賞するには、一錢も出さずに買

える。酔えば推されなくても「玉山が倒れるように」酔眼にうつる。舒州の杓よ、力士のうつわよ。この李白はおまたちと生死を共にしよう。襄王がたのしんだという巫山の女神との美しいロマンスは遠い昔の夢と消え、今はただ猿が悲しく鳴くだけである、と結んでいる。

この詩は、李白が三十五歳頃の詩といわれるが、その後翰林供奉として長安に出仕した時期を経て、梁園に来たときの「梁園吟」をみることにする。長安を追われた李白は、約十年余りを河南省開封付近ですごしたが、この詩は開封市東南にある梁の一带を放浪したときの不遇時代の作である。天宝三年（紀元744年）李白が四十四歳頃の長詩である。

我黄河の舟に乗って京の関を去り
帆を掛けて進まんとすれば波は山に連なり、
天は長く水は闊くして遠行を厭う。
古蹟を訪うて始めて平台のほとりに辿りついた。
平台に旅人となって憂思多く
酒に対して遂に梁園の歌をつくる。
蓬池で阮籍の詠じた詩を憶い浮べ
「清かな水は大波を揚げ」の句を口ずさむ。

……

人生は天命だと曉れば愁える時間などあるものか、
まずは美酒を飲んで高樓に登れば
平頭の給仕人が大扇であおいでくれて
夏のさなかも熱からず、はや秋かと疑われる。

……

塩をつまみ酒を把ってひたすら飲もう
伯夷・叔斉を学んで高潔なまねなどすまい。

昔の人で豪貴なのは信陵君
今の人はその信陵の墳を耕している。

.....

.....

暫く東山に隠れ、時を見て起ち
済民に乗り出すのも未だ晩くはあるまい。

この詩は、長安を去って、間もないときの詩であり、好きな酒を十分飲んで、再び生気をとりもどして、「人民を救済せん」と意気込んでいるのは、憂国済民の情があふれている。

同じ頃李白は、昔日の長安を偲びつつ、「蒼生を済う」という意気込みを再び心に燃やすのであるが、時の盛衰に感涙し、うっ屈した気持を紛らわすべく、月下に独り酌む酒を謳歌したのである。「月下独酌」四首のうち、「その一」を記することにしよう。

花間一壺酒
独酌無相親
举盃邀明月
对影成三人
月既不解飲
影徒隨我身
暫伴月將影
行樂須及春

独り酒とはなんとさびしいものであろうか、李白は明月を迎えて杯をあげ、自分の影を入れると三人の仲間ができる。わたしが歌うと月もさまよい、わたしが踊ると影も踊り出す。この楽しみは春のうちにこそできる夢幻の境地である。

また「山中与幽人对酌」は、山荘で、幽人すなわち隠者と、差し向いで心ゆくまで飲んだ時の有名な詩をみよう。

兩人対酌山花開
一杯一杯復一杯
我醉欲眠卿且去
明朝有意抱琴来

この詩は、誰もが口ずさむことのできる、軽妙平明な詩であるが、花と酒と琴とを取り合わせながらの交際は、実にすばらしい。

天宝十一年（西紀752年）、李白五十二歳のころ、嵩山つうざんの元丹丘のところで詠んだものと思われる詩に「将進酒」がある。元丹丘は道士であって、嵩山や潁陽に住み、また華山や石門山にも住んだことがあり、李白をよく理解し李白を愛するよき友人であった。

君見ずや黄河の水は天上より来たる
奔流して東海に到り再び回らない
君見ずや高堂の鏡に映して白髪を悲しむ
朝には青糸の如きも暮には雪と成るを
人生は意にまかせて須らく飲を尽くすべし
金罍を空しく月に対させる莫かれ
天が我が才能を生んだ以上必ず用有ろう
千金を使い果しても元通り復たやって来る
羊を烹牛を宰りて且く楽しもう
須らく一氣に三百杯を飲むべきだ
岑先生よ、丹丘君よ
將に酒を進めんとす
君杯を停むる莫かれ
君の為に一曲を歌うから
君も我が為に耳を傾けて聴いてくれ

.....

.....

五花の良馬、千金の皮衣
児を呼び持出して美酒に換えさせ
爾と一緒に万年の愁を銷そう。

晩年を迎えた李白は、人生の無常を歌いながら、時の推移を嘆く愁いを、月の照らす夜、一飲に三百杯の金罍を傾けて晴らそうと歌いあげている。そして、我が才能の素晴らしさを高らかに自負し、いつかは必ずまた用をなすであろうことを忘れてない。最後の結びに「爾」は先の部分の岑夫子と丹丘と解釈することもできる

が、「襄陽の歌」に「李白爾と死生を同じくせん」の美酒の「爾」ととることもできるであろう。

また李白の「蜀道難」は、“噫呼危乎高哉”蜀道之艱難於上青天。と陝西から四川にいたる山道のけわしさ、危険きわまりないざん岩を描いている、と推定されるが、この道の危険は、政治的生活全般におよぶ寓意詩のようにも読みとれる。

つぎの「行路難」は、

……

……

拔劍四顧心茫然
欲渡黄河水塞川
將登太行雪滿山
閑來垂釣碧溪上
忽復乘舟夢日辺
行路難
行路難
多岐路 今安在
長風破浪会有時
真挂雲帆濟滄海

劍を抜いて四方を見まわしても、黄河は氷が川すじを塞いでおり、太行山は雪におおわれていて、心は茫然としてどうすることもできない。そこで、太公望をまねて、碧溪水のほとりで、釣り糸を垂れてみる。

しかし、ふと気がつくと、やはり舟に乗って空の果ての太陽を目標に行くことを夢見る。人生の行路は困難だ。ほんとに行路は困難だ。分れ路が多すぎる。わたしが夢見る太陽はいったい何所にあるのか？

大風に乗じて万里の波をのりこえる。そういう時期がいつか必ず来る。その時こそ、まっしぐらに、雲のような速い帆をかけて、大海原をわたっていかう。と勇壮に結んでいる。

李白は長安を追われてから、またもや、放浪生活のさなか、たまたま洛陽に住んでいた誠実

な社会派詩人杜甫と会い、お互いに意気投合して共に遊び、共に飲み、共に詩を作るようになった。また時には、失意のあまり一時の楽しみを痛飲にたよって、奔放不羈に振る舞うこともありながら、「金陵の鳳凰台に登る」の作のように、「長安は見えず人をして愁えしむ」と、かつての長安の生活を思い感慨にふけりつつ、憂国済民の機会が到来することを切望している。このように李白は、長安を去ってからの漫遊生活のなかに、詩人的感情の起伏のはげしい流れのまにまに、天才的な詩人としての創作活動を培ったものと思われる。

〔Ⅲ〕李白と関わりの深い 朝鮮の詩人たち

高麗朝時代の朝鮮の代表的な詩人李奎報⁶⁾は、詩と酒と琴をととも愛したことにおいて李白と共通したところが多く、自ら「詩琴酒三酷好先生」と自称したほどである。当時の朝鮮の文人達は彼を朝鮮の李太白だと呼んだし、その影響を多く受けたことは想像に難くない。

李奎報は天地を窮屈で狭く感じたとしながら、生活の貧苦に拘泥されることなく、浩蕩な性格であったことは、つぎの詩がよく物語っている。

天地為衾枕 江河作酒池
願成千日飲 醉遇太平時

このように天地を衾枕に風論しながら、長江と黄河に酒池をたとえ、千日も痛飲しつつ太平の時代を念願している。これは、李白の「醉來臥空山、天地即衾枕」を連想させられる。

李奎報は家が困窮な面は李白と異なる。「藍縷な衣服を質に入れて酒にかえて」では、その貧困に悲嘆しながらも、尋ねてきた友人と飲むため、藍縷な衣服を澄み透った酒にかえて酒盃を重ねて傾けるうちに、漸次酒興にたえがたく、

詩情に溢れる心境をつぎのように詠っている。

典我身上藍縷衣 換此一壺清且溢
 航般屢倒興復酣 有如狂馬泛駕欲奔軼
 振搖林木我放歌 倒瀉江湖君縱筆
 歌雪憤兮觴聲長 筆洩怒兮猛勢逸

.....

興子論平生 平昔鬱腸醉後盡嘔出
 撫劍起舞坐更飲 一杯一杯聊復一

酒興にたえがたく、我が心は狂馬がくびきを投げ捨てて疾走するが如し、我が歌う歌声に森林の木は揺れ動き、その時走らす筆は江水を逆さに注ぐが如し、歌声は鬱憤晴らすが如く荒々しくなり、筆も怒りを吹き出すが如く猛しい勢いである。

.....

平素の鬱屈な気持ち、酔ったまぎれに、すべて吐き出してしまった。長劍を撫でながら踊っては、また飲むと、一杯一杯また一杯である。

以上の如く困窮の中にも風刺諧謔性に富み実に面白く愉快である。

李奎報は、一杯の酒を飲みながら一首の詩をつくるという(偶吟)では、つぎのように歌っている。

無酒詩可停 無詩酒可斥
 詩酒皆所嗜 相值兩相得
 信手書一句 信口傾一酌
 奈何遮老子 俱得詩酒癖

.....

相逢酒発興 是意終莫測

酒がなければ詩情も止まり、詩がなければ酒も飲む気にならない。詩と酒は我共に好む故、お互いに合わさって、互いになくってはならない。手を進めば一句の詩を作り、口が進めば一杯の

酒を飲む。我なぜか、困った老人である。詩のくせと酒癖を共に学びしを。

.....

盃を合わせば興おのずから発するを、その意志は遂に知るよしもなし。と「李白一斗詩百篇」の有名な詩句を連想されるのである。

当時の詩人崔滋は、彼の詩を評して、「日月のようで称讃を超越する」と言ったし、なお天才俊邁と言ひ卓然天成とも言った。中国の詩人と比べれば、杜甫のように沈吟でなく、むしろ李白のように、一気呵成で神韻が躍動するようである。さらに李白のような詩想とイメージが溢れるところが多く散見される。まず、彼は酒に対する讃歌で「続将進酒歌」を作詩したが、これは唐の李賀の「将進酒」を参考にしたものであるが、李白の「将進酒辞」がその造形であることは自明である。特に李白が傾倒した月に対するイメージも李奎報の詩で多く散見される。李奎報の「井中月」詩に

山僧貪月色 並汲一瓶中
 到寺方応覚 瓶傾月亦空

僧は月光をむさぼり、一瓶の酒壺の中に月まで汲み込ませた。寺に酔って、はじめて瓶を傾けば月もまた消えることを悟るという諧謔的な詩以外にも、月を詠んだ詩は多い。このようにして、彼は月のイメージの中に、月影と浪漫をえがき、清新さを表すと同時に希望と理想の象徴としても表現した。

晩唐の時代に中国に留学した詩人崔致遠⁽⁶⁾は、長安において賦と詩および、雑詩を多く書き、高い官職にもついたが、たとえば「秋夜雨中」という帰国後の詩で

秋風唯苦吟 拳世少知音

窓外三更雨 燈前万里心

という孤独の詩を苦吟しながら、この身は燈の前にいるが心ははるか万里にある、という。この万里の心は中国を慕う事大主義として非難する詩人もいる中で、李奎報は度量が広く、天性が公明正大であったので、致遠の心境をよく理解し、内外の非難を痛烈に批判したのである。

一方、李奎報は白雲小説の中で、崔致遠は当時の中国詩人と比較してみる場合、その文章力が非常にすぐれて遜色がないにも拘らず、唐書文芸列伝に彼の伝が記録されていない拙劣さを非難している。これは当時の時代的制約と照らしてみる時、大変進歩的な批判意識からわき出た発言であるといえるし、民族的な自立意識の濃厚な反映であるといえることができる。

李朝歌壇の最高峰といわれる鄭澈⁽⁷⁾は、漢文学と国文学など両方に透徹した文人であった。漢文中心が支配する当時代において、彼は漢詩とともに、洗練された朝鮮語を巧みに駆使した朝鮮民族固有の詩である「時調」を多く創作するという新しい境地を展開したところに、その特徴をみることができる。彼の詩歌集である「松江歌辞」に収録されている「関東別曲」「思美人曲」「星山別曲」などの数多くの時調は、漢文を読み書きすることが当然のように考えられた当時の風潮に抗して、朝鮮語を意識的に使用している点が注目値する。

一方彼は、李王朝の名物である党争と、壬辰倭乱という激動の時代の中に生きてだけに政治的関心も深く、複雑な現実挫折することなく、理想的な政治形態を実現することが彼の夢であり、抱負であった。したがって、彼の心は現実と理想の中を去来しながら、詩と酒と玄瑟で放浪の人生を送ったところに「酒仙の詩人」としての面目躍如たるものを見ることができる。

放浪の中の「月夜」では、つぎのように歌っている。

随雲度重嶺 伴月宿虚簷
晨起解舟去 麻衣清露霑

雲をしたがい嶺を越え、またこえて、
月と友となし、空き家に宿をとる。
朝起きて舟をといて去らんとすれば、
麻衣には露がぬれているではないか。

また「対月独酌」では

夕月杯中倒 春風面上浮
乾坤一孤劍 長嘯更登樓

夕空の月影が杯の中に倒映すれば、
春風が我が顔をすぎ去る。
天地の孤劍をひき上げて、
また高樓にのぼり、長い口笛を吹く。

月の下にすべてを忘れて酒を飲んで、月と我と一緒に鬱積した精神の解放を試みながらも、その境地に陶然として酒に酔えない現実的な心境が反映されている。

党争のはげしい中で、敵の多い鄭澈であったが、宣祖王の彼に対する寵愛は大変なものであった。壬辰倭乱の時、宣祖王が平安道義州城の軍事指揮処として使用した統軍亭を懐かしんだ詠懐を、つぎのように詠んでいる。

三千里外美人在 十二樓中秋月明
安得此身化為鶴 統軍亭下一悲鳴

三千里の外に美人がおわすが、十二間の樓中には、秋月が明るい。いかにすれば、この身鶴となりて、統軍亭の下で一度思い切り鳴いてみようぞ。

また歌辞「関東別曲」では、

江湖にて、病床に臥すわれを、八百里関東の地の方伯たれと、のたまひし、かしこき聖のみ恵み極みなきこと。

このように、鄭澈もまた王に対する忠誠心は大変なもので、これらの詩の中に、当時の中世的な社会秩序確立のための現実指向的な（憂時恋君）の意識がよく現れている。

李朝中期ごろの歌壇には、すぐれた二人の女流歌人を出している。黄真伊と許蘭雪軒⁽⁶⁾である。黄真伊は妓生、許氏は士族出の閨秀。

許氏の名は楚姫、蘭雪軒という号でひろく知られている。自ら平凡を拒否した彼女は、この世によくやく27歳までの薄命であったが、その短い生涯の中にもすぐれた詩人として生きたのである。

彼女は封建社会の代表的な安東金氏の家に嫁入したので、その詩の中には、悲しみと生の葛藤を現したものが多く見られる。いわば亭主を恋慕する詩を作ることさへ非難される当時の時代状況の中で、彼女の想像力は自然に神仙世界に遊ぶようになる。

仙界を遊ぶ歌という多くの「遊仙詞」の中で、李白が酔中に舟遊びをするうちに、江畔に映る月と戯れようとして昇天したという伝説に困んで、つぎのように歌っている。

騎鯨学士禮瑤京 王母相留宴碧城
手展彩毫書玉宇 醉顔猶似進清平

鯨に乗った翰林学士瑤台に禮して上がれば、西王母うれしがりながら、碧城で宴を開いた。虹の筆を手にとって、玉の字を書けば、酔った顔は恰も「清平調」を捧げる時のようである。

いうまでもなく、この詩は詩仙李白を伝説的に詠んでいる。

黄真伊は許蘭雪軒とは対照的に良家の閨秀になることを潔ぎよくあきらめ、多くの男性を手玉にとることのできる妓生になろうと決心した、当時の封建社会における特異な女流詩人である。妓生の世界に入った彼女はまさに自由奔放、身も心も燃えつくすような激しい恋に生きたかと思うと、また男性を冷たく拒否したり、自由自在にろ絡したことがうかがえる。

当時の閑良・風流人として自他ともに任ずる碧溪守という男の傲慢な男の鼻をへし折った、つぎのような「時調」⁽⁹⁾は知らぬ人がないくらい有名である。

青山のせせらぎの碧溪水(碧溪守と水は同音)よ、その早いことを自慢するなかれ、ひとたび蒼海(ソウルの漢陽をさす)に到らば、再び戻ることはむずかしい。

明月(真伊の名)が空いっぱい照らしているから休んでいったらいかがなものよ。

という実に隠喩に富んだすばらしい歌声に、さすがの碧溪守も馬から飛びおり、彼女の軍門にくだったという話である。

かといえ、黄真伊は李白の詩廬山瀑布と朴淵瀑布を比喻しながら、祖国のすばらしい瀑布の絶景を誇り高く歌っている。

19世紀の詩人李炳淵⁽¹⁰⁾は、二十二歳のとき家を出て、五十七歳で客死するまで、笠をかぶり杖一本をたよりに朝鮮全道、津々浦々(坊坊曲曲)を放浪した詩人である。彼はいつも笠をかぶって放浪したので本名よりも金笠という名で一般に親しまれている。

李白が長安の俗物どもと縁を切って全国を放

浪しながら飄逸豪放な詩を歴史に燦然と輝かした如く、金笠も放浪生活の中に、両班支配層に対する辛辣な諧謔・風刺詩と、金剛山をこよなく愛する多くの詩を歌い、全国の山川草木を詠嘆しながら、行雲流水のような心境で放浪生活を送ったところに、一派共通するものを憶える。

金剛山の絶景を歌った多くの詩から、そのいくつかを見ることにする。

松松栢栢岩岩迴
水水山山処処奇

松と松、栢と栢が岩間をめぐり、
水と水、山と山がいたる所、奇観である

詩型にこだわらず、同じ字を繰り返す平易な中に、金剛山の絶景を詠じた詩である。

他にも、轟々金剛山、高峰萬二千、聳え立つ金剛山は、高い峯が萬二千である。

萬二千峰歴歴遊、春風独上衆樓隅。

万二千の峯を遍歴すれば、春風に独り衆樓の曲がり角に登っていた。

また、金剛山詩

向青山去 水彌何来

私は青山に向かって行くのに、清き水よ、汝は何処に流れいくのか、など簡単に要約している。

さらに朝鮮全土を遊覧しながら歌った主な詩を拾って見ることにしよう。

咸関嶺（咸鏡南道北青の高山地帯）
四月咸関嶺、北青郡守寒

杜鵑今始発、春亦上山難

四月にも咸関嶺は春おそく、北青の郡守は寒がる。杜鵑花の花が咲きはじめたが、春も山が高く登り難たし、と北青の高山地帯は春がおそく訪づれ、まだ寒いということ、結句には味わいよく現している。

妙香山詩

平生所欲者何求、每擬妙香山一遊
山疊々千峰萬仞 路層々十歩九休

平素やりたい欲望がなにかといえば、いつも妙香山（平安北道にある）で一度遊ぶことを考えているよ。山は疊々として、千峰万尋であるし、路は層々としてけわしく、十歩に九回は休まねばならない。

大同江練光亭

截然乎吃立高門 碧萬頃蒼波直翻
一斗酒三春過客 千絲柳十里江村
孤舟驚帶來霞色 雙白鳩飛去雪痕
波上之亭亭上我 坐初更夜月黄昏

大同江練光亭には高い門が高くそびえたち、その絶壁の下には限りなく広い波がうねる。一斗の酒で過ぎ行く客が春遊を楽しめば、十里江村には千糸のような柳が垂れている。一羽の鷺は霞色を帯びて来、二羽の白い鳩は、紛々と飛ぶ白雪の如し。波の上には亭があり、亭の上には我が居れば、たそがれがすぎて月が出る夜まで、坐って行くことを忘れる。

大同江上

大同江上仙舟泛 吹笛歌声泳遠風
客子停驂閑不樂 蒼梧山色暮雲中

大同江上に画のような舟が浮んでおり、笛吹

く歌声が風によって遠くから泳いでくるが、江畔に馬をとめて聞く旅人の心は悲しく、蒼梧山の緑なす色が雲の中に暮れて行く。

大同江辺で旅情をうたった詩である。

浮碧樓吟

三山半落青天外 二水中分白鷺洲
已矣謫仙先我得 斜陽投筆下西樓

大同江辺の浮碧樓に登って、大同江の彼方を眺めれば、まさに李白の詩（三山が空の彼方に半分落ち、二つに分かれた川にはさまれて白鷺が見える）そのものと絶句したのであろう。あまりにも憎らしいほどの驚くべき詩句に、己より先に李白に先手を打たれて腹立たしく、夕日に筆を投げ出して西樓に下った。と李白の詩に驚嘆している。

開城

故国江山立馬愁 半千王業空一邱
煙生麋檣寒鴉夕 葉落荒台白雁秋
石狗年深難轉舌 銅台陔滅但垂頭
周覲別有傷心処 善竹橋川涸不流

故郷山川に馬をとめて愁えば、半千年の王業も虚しい丘と化す。麋虚の垣根に夕煙がたち、夕陽に鳥が寒しく飛び交う。落葉する荒廢の台の上を秋の雁が去っていく。石狗は年月がかさなって舌を動かすことができず、銅台は破滅されてただ首のみ垂れている。まわりを眺めれば、特に傷心な所があり、「善竹橋」の河の流れが、喉をつまらせて流れないようである。

〔註〕憂国の志鄭夢周の死を悼んで詠んだ詩である。

登廣寒樓

南国風光尽此樓 龍城之下鵲橋頭
江空急雨無端過 野潤余雲不肯收

千里筇鞋孤客到 四時笳鼓衆仙遊
銀河一脈連蓬島 未必靈區入海求

南国の風致は、この廣寒樓に極み、龍城の直下には烏鵲橋の頭がある。

渴いた河には、夕立がくれば限りなく流れいき、曠野には、つねに雲が浮ぶ。

千里の途を孤客はわらじと杖をたよりに、いつも笛の音が絶えることなく、仙人が遊んでいる。

銀河水の一すじが蓬萊島とつながりとして、必ずしも、海に入りて靈区を求めたのではない。

〔註〕有名な春香伝のふるさと南原の広寒樓をいみじくもリアルに歌った詩である。

以上のように、金笠は朝鮮全土を隈なく放逐しながら、即興的な詩を多く歌っていることがわかる。

尹善道は鄭澈とともに、李朝中期の代表的な詩人である。「壬辰倭乱」の後遺症が色こく残って、相変わらず世相が騒然とするさなか、遠い濟州島にでも行って、この世と絶縁して生きようと決心して船出して濟州島へ向かう途中、甫吉島の美しさにひかれて、ここに下船して、風光明媚、安息の地となった。

彼の隠遁生活からして、美しい自然を求めた詩の中に、清らかで絶えることのない水、永久不変の石、四季を通じて青々としている松、節を曲げない竹、四囲をくまなく照らす明るい月を「五友」とたたえた「五友歌」では、李白が月を友と見なした同じ心境であろう。尹善道は「五友歌」でつぎのようにうたっている。

わが友の数きかれば、水と石、松と竹、東の山に月の出づれば、さらにまた心楽しむ。この五つおきては、われに望むものなし。

朝鮮でも月を歌った詩は多く、尹善道の「五友歌」は李白が月を友と見なしているのと同じである。

おわりに

八世紀の唐の文化といえば、世界に冠たるものであり、同じ漢字文化圏の隣国朝鮮においてその影響をうけなかったといえようことになる。とくに唐時代の李白は、東洋的な詩人としてはおよそ全面的といえるほど、魅力的な詩人としての風格をそなえた天才的詩人であった。朝鮮の詩人がこのような詩人の影響を多少なりともうけなかったとすれば、これまたうそになるであろう。

ここでは、高麗・李朝時代における多くの詩人の中で、とくに李白と関係の深い詩人達の詩を通じて、いくらか列挙したにすぎないが、これらの関係をさらに深めて考察していけばもっと興味深々たるものがあると思われる。

※李白の詩の訳にあたっては、『漢詩大系 8、李白』（青木正兒 集英社、昭和 47 年版）を参考にした。

参考文献

- (1) 田中克己著『漢詩大系 12、白楽天』集英社、昭和 53 年版
- (2) 後藤木雄著『支那四千年史』（第一書房、昭和 16 年 3 月版）
- (3) 『漢書九十七卷・下』「有孝成趙皇后傳」中華書局
- (4) 文道平・朴忠祿・宗連玉「李白と朝鮮詩歌文学」『大阪経済法科大学アジア研究所年報、第 4 号』1993 年
- (5) 許ギョンジン編『白雲李奎報詩選』平民社 1986 年
- (6) 許ギョンジン編『孤雲 崔致遠詩選』平民社 1989 年
- (7) 許ギョンジン編『松江 鄭澈詩選』平民社 1993 年
- (8) 許ギョンジン編『許蘭雪軒 詩選』平民社 1987 年
- (9) 尹学準著『時調 朝鮮の詩心』創樹社 1978 年
- (10) 許永寿編『金笠詩集』太学苑 1988 年